

江戸東京博物館友の会会報

目次	新春特集「特別展「江戸城」をめぐって」……………	1	会議・会合日誌……………	7
	新年祝辞(竹内館長/岩松会長)……………	3	えど友プラザ『セイラムを訪ねて』……………	8
	友の会セミナー『江戸の最高学府』……………	4	同『私のお宝(古文書)「薩摩藩大砲購入依頼状」』…	9
	特別観覧会『ボストン美術館所蔵 肉筆浮世絵展』	5	ご意見・ご要望にお答えします……………	9
	江戸博クリップ『学芸員の日常』……………	5	江戸博から大川を渡って…①【柳橋・浅草橋界限】…	10
	見学会『徳川氏発祥の地世良田とその周辺史跡探訪』…	6	催事案内……………	11
	えど友サークルだより……………	7	会員優待のお知らせ……………	12

## [新春特集] 特別展「江戸城」をめぐって 壮大さを物語る展示の数々

本丸御殿内部や天守をバーチャルリアリティで再現

あけましておめでとうございます。  
江戸博は正月2日から開館し、常設展のほか、江戸城築城550年を記念した特別展「江戸城」が開催されます。江戸城は会員のみなさんがとても関心を持たれているテーマではないかと思えます。この特別展の企画を担当された同館学芸員の齋藤慎一さんに展示内容の概要や見どころなどを伺いました。

出席者 齋藤慎一(江戸博学芸員)  
聞き手 山本 隆(事業部会)  
岡橋園子(広報部会)  
菊池紀子(総務部会)  
司会 松原 良(広報部会)

### 江戸城ができるまで

—太田道灌によって江戸城が作られたということですが、江戸城の始まりはどのようなものでしょうか。

齋藤 はい、歴史的には江戸城の始まりとして鎌倉時代に江戸重長が築いた



齋藤慎一さん

とされていますが確かな証拠はありません。江戸城の存在がはっきりするのは長禄元年(1457)に太田道灌によって築城されてからです。それ以来連綿と今に続いています。ここから江戸の町は広がって行っています。

—急速に発展を遂げるといえるのは、やはり徳川家康が江戸幕府を開いたときからでしょうか。

齋藤 そうですね、確かに家康が将軍になって江戸は発展するわけですが、この前に太田道灌がいたわけで、太田道灌以後・家康入城以前の重要性も見

のがせません。このころの城下町の様子を地図で展示する予定です。道灌の頃の江戸では平川という地名がたくさん出てきます。そしてこの辺から浅草寺方向に城下町が広がっていたようで、港も平川付近にありました。のちに家康が来て港は埋め立てられ大幅に開拓されることになります。

—太田道灌の頃、江戸の様子はどのようなものでしょうか

齋藤 太田道灌が江戸に入ったときに、いまの麴町のところにある平河天満宮が平川にありました。平川には禅僧がやってきて「梅花無尽蔵」という本を書くのですが、その中で天満宮にふさわしく菅原道真をここに祀ったことが書いてあります。その周りを梅林で囲めとしていて、これが梅林坂の由来です。

家康は自分の町場を作るためにこの町を動かします。江戸時代初頭には平川に数カ所寺社があったとされてい

て、この周辺が古い段階の江戸中心地であったようです。お寺があって、神社の年中行事もあったわけで、これを支える町衆がいたわけですが、寺社を移転するという事は町場の解体を意味しています。こうして新しい町を作っていったことになりま

## 江戸城の築城

——江戸城の築城はどのようにして始まったのでしょうか。

齋藤 まず石垣をどうやって作ったか。今回の展示調査において、伊豆の石切りの工場を調査しました。そうしましたら2m四方位の石材が散乱した石切場がありました。その利権は藩の場合や職人の場合などあったようです。発掘現場では当時の名前は分からなくなっていますが、当時の小田原には石切りの職人がいて、徳川家康が呼び出して、江戸城の石垣の石の切り出しを命じていたそうです。ご子孫は今でも石切をしておられ、そのお宅から文書をお借りしてきています。戦国時代に五輪塔・石鉢・白などいろいろなものを作っており、失敗したものを周辺に捨てていました。これを6点ほどお借りして展示することにしました。あともう一つ、伊豆半島の中では石切り場がいくつかあり、それを語っている細川家の文書があります。これも石の産地として展示します。

切り出した石を和船で運んだのは前田家で、江戸城天守台日記の中にその状況が書かれています。この中に石材を運んでいる様子の挿絵が入っていてこれを展示します。

——江戸城で独特のものがあるのでしょうか。

齋藤 象徴的なものとして金箔瓦のこ



松原良さん

とがあげられます。西の方では信長の安土城でも秀吉の大坂城でも金箔瓦が出ていて、背景には金の増産があり、それを利用できたことがあります。ところが、江戸での金箔瓦はこれまでも出ていませんでした。最近、甲府城だとか沼田城でも金箔瓦が出ていて、この現象を捉えて金箔瓦による徳川包囲網という仮説を立てた人がいます。豊臣系の城館では金箔瓦が出ていますが、徳川系では出ていないということから仮説が言われたわけです。これが江戸でも出たということで、その仮説が簡単には成り立たなくなりました。江戸城本体から出ていないというのは、建て替えのたびに土盛りがされており、古い場所はすべて埋め立てられてしまっているためです。ところが江戸城から2点の金箔瓦が出土しました。一点は桜田門から出ており、これは展示しませんが、ルーペで小さな金の破片が見えます。また西の丸の近く道灌堀の外側の大道通りからも出てきました。

## 天下人の城とは

——天下人としての家康は城に特別のことをしたのでしょうか。

齋藤 確かに日本全国には数多くの城があります。しかし天下人の城となると織田信長の安土城、豊臣秀吉の大坂城、そして徳川家康の江戸城の三つです。当時の天下人としての威信を賭けて築城したものであり、これらを当時の資料を基に比較展示し競った様子を見ることができます。

江戸城の天守は石垣の土台が現存しますが、その場所に天守はありませんでした。というのも徳川幕府となって大きくは3回改築され、場所もその度に移動しているのです。今の場所は石垣を作った後、政策の変更で天守のないまま残されたというのが定説です。しかしいずれにせよ江戸城天守の規模は大きく、その資料を余すことなく展示するようにしました。

今の天守台に天守を再建しようとす



山本隆さん

る動きがあります。しかし、再建すると天守台などが崩れてしまうので、ボーリングをしてしっかりした土台に改修する必要があります。文化財の破壊になってしまいます。これは今地方の城の再建でも同じことが言えて、甲府城とか仙台城がそれで大騒ぎになっています。——天下人としての威信とかそういった目で見えた場合、特別のものがあるのでしょうか。

齋藤 たとえば総理大臣・大臣の認証式があり、われわれはその写真を見て政府の交代を知ります。しかし時の將軍の交代をどうして世間に知らしめるか、新聞やテレビのない時代には、明確に知らせる手段として築城があったのではないかと思います。慶長、元和、寛永の3回の天守の建築は、それぞれ初代家康、2代秀忠、3代家光と代の交代期に相当し、新しい天守を築くことが当時の政権交代を意味していたものと思われ

——そのほかには？

齋藤 一つには石の使い方がありません。城の石の産地は1カ所だけでなく他からも持ってきています。江戸城の場合は灰色っぽい黒い石が伊豆から来ていますが、天守台とか正面の門とか角のところの石というのは関西の芦屋近辺の白御影という石を使っています。石垣の裏には雨で流されないように砂利をいっぱい入れるのですが、それには利根川の中流域のものを使っています。天守台は白御影だけでできていますが、これは將軍の威力を表しているのではないかと思います。姫路城でも同じで3種の石を使い分けています。たちやま石という白っぽい石、チャート石、安山岩、中心部に白い石などを使っています。

## 新年祝辞

江戸東京博物館 館長 竹内 誠

あけましておめでとうございます。

おかげさまで、昨年もたくさんのお客様にご来館いただき、感謝いたしております。これもひとえに友の会の皆様が常日頃、親身になって叱咤激励してくださっている賜物と厚く御礼申し上げます。

本年もまた皆様の声を糧としながら、よりいっそうご満足いただける博物館を、館員一同めざしていく所存です。友の会の皆様の一層のご支援を本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

## 新年祝辞

江戸東京博物館友の会 会長 岩松 精

新年おめでとうございます。

幸いにして、今期に入り友の会会員も1,200人近くになり、私たち役員・各部会員一同みなさんの期待の大きさに身が引き締まる思いでいっぱいです。

また、江戸博からはセミナーへの講師派遣など種々のご支援をいただき大変感謝しております。

本年も会員のみなさんの声に積極的に耳を傾け、ご満足いただけるような企画・運営に努めてまいりますので、みなさんの一層のご協力をお願い申し上げます。

## 江戸城の模型

——私たちは江戸城がどんな形をしていたかにとっても関心があります。展示ではその点で何かあるのでしょうか。

齋藤 このたび兵庫県立歴史博物館がつくった江戸城の50分の1の模型があり、それをお借りしてきています。その隣に松本城の模型も展示しますが高さは半分であり、いかに江戸城が壮大であったかを物語っています。

慶長・元和・寛永の築城の3度の天守建築のうち、寛永については建築図面での確証はありますが、慶長と元和については意見が分かれています。江戸名所屏風の天守も元和天守の絵であるとの解説はありますが確証がとれていません。「江戸天下祭図屏風」なども展示しますが、この中の天守の絵が正しいとはいえません。屏風の絵は後からはめ込むことが多く、屏風の絵を見ていると建物が少しずつ違ってきます。その中で「武州州学十二景図巻」は上野から見た図であり、実際に近いのではないかと考えています。

今回の展示では本丸御殿の模型も展



岡橋 園子さん

示します。2m×2m位の大きなもので、天井を吊り上げ、中の構造が見えるようになっていきます。

また万延のときの江戸城本丸の表御前の絵図があり、4m×4mという巨大なものです。これまであまりにも大きすぎて過去に1回しか出したことはないのですが今回は展示します。絵図の中では最大の資料になるのではないかと思います。

——石垣の土台が現存していますが、やはりあそこに天守があったのでしょうか。

齋藤 いやそれは違います。どんどん江戸城が拡張し、本丸の表と大奥が整っていく中で天守が邪魔だということと移動されたようです。古い段階ではずっと本丸の中にありました。北桔橋というところに北郭があったのが、埋められて本丸として一面になり北側に天守が移転となっています。さらに本丸の拡張に伴う建て替えがあります。そして今ある天守の石垣には天守は建っていません。あれは明暦の大火のあと前田藩に天守台を造れという命令を出すのですが、しかし天守の建築は石垣ができた段階で町場の復興が優先ということで中止となったようです。

——天守の高さは物の本でもまちまちなのですが、どのくらいあったのでしょうか。



菊池 紀子さん

齋藤 そうですね、高さはいろいろ説があります。これは寛永の天主の図という中で、古い段階では1間が7尺5寸だったものが6尺に変更されていることが原因のようです。京間では6尺5寸になります。寸法の差については注意をしなければいけないようです。

## 江戸城の内部

——大画面の映像があると聞きましたが、具体的にはどんなものですか。

齋藤 江戸城に登城する様子から表御前・大奥など江戸城の本丸御殿内部をバーチャルリアリティによる大型画面で見ることができます。最後は本丸の勇姿を概観することで終わるように予定しています。大型スクリーンであり、立体感がありなかなかのものですが、約10分間の紹介となります。

——特別展「江戸城」が楽しみになってきました。本日はいろいろと詳しいお話をありがとうございました。

【記録】 文・写真：広報部会・林榮二

## 江戸の最高学府

—昌平黌とそこに学んだ人々—

講師 村山吉廣さん (早稲田大学名誉教授・斯文会常務理事)



### 昌平黌の歴史

寛永7年(1630)に林羅山が上野忍ヶ岡に私塾を開き、続いて孔子廟を建てたのが始まりです。五代將軍綱吉の元禄3年(1690)に神田湯島に移りました。神田明神の前面にあたり『聖堂の孔子將門に尻を出し』と言う川柳があります。さらに松平定信の「寛政の改革」に際し林家の私塾を取公し、幕府直轄の学問所としました。これが「昌平坂学問所」です。「黌」は「校」と同義です。明治維新後、昌平学校・大学校の名称を経て、明治3年(1870)に廃止されました。建物は関東大震災で消滅しましたが、後に昭和10年(1935)現在の「湯島聖堂」として再建されました。

### 昌平黌の学問と制度

林羅山は家康から家綱まで將軍4代に儒官として仕え、政治顧問としても幕府の教学制度に貢献しました。これにより林家の「朱子学」が幕府の「正学」「官学」となる基礎を作り、「寛政異学の禁」で朱子学以外をすべて異学とみなすこととなりました。また有名な「寛政三博士」など時代を代表する学者たちが次々と教育に当たり、これにより「学問所」は名実ともにわが国最高の学問・教育の総本山となりました。

当初からその目的は人材の育成にあり、入学者は幕臣と儒者の子弟に限られましたが、寛政期以降は旗本の子弟のほか、陪臣・郷士・浪人にも入学を許しました。そのため幕末には各藩の秀才たちをはじめ、将来性のある人材が集まり活況を呈しました。科目は四

書・五経・三礼を教える経科、中国史書を教える漢土史料、日中の法制を教える刑法科及び詩文科がありました。教学は「文」に限られ、「武」の施設はありませんでした。教場は稽古場とよばれ、陪臣・浪人たちのためには書生寮がありました。

### 昌平黌の教育と学風

講義は大学頭と儒官による「定日<sup>ていつ</sup>の講釈」と、書生が担当する「仰高門日講<sup>げうこう</sup>」とがあり、それぞれ外部の聴講が許された「公開講座」でもありました。試験は3年ごとに「学問吟味」として厳しく行われました。

幕府は朱子学を「正学」としていましたが、世間一般には依然として学問・学派の自由がありました。「学問所」で学んだ人々は地方に戻って、藩儒となったり私塾を開いたりして、教育の普及に活躍しました。書生寮は自治制があり、学習法も権威主義ではなく「素読」「会読」「輪読」など、あくまで主体的な自由討究などで個性を伸張しました。

### 幕末期に昌平黌に学んだ人々

幕末期に昌平黌に学んだ主な人々をあげてみます。

鈴木石橋。宝暦4年(1754) - 文化12年(1815)。下野鹿沼石橋町の人。昌平黌に学んだ後、帰郷して石橋町に私塾を開き教授に当るほか社会救済・公共事業にも尽くしました。

齊藤拙堂。寛政9年(1797) - 慶応元年(1865)。津藩士。儒者・漢詩人として天下に知られ、洋学・兵法・砲術にも詳しく海防論も展開しました。

古賀茶溪。文化13年(1816) - 明

治17年(1884)。父を継いで儒官となりましたが、早くから西洋事情に通じていて長崎、下田で外交に奔走、ついで要職について信念をもって開国政策を担いました。

中村元起。文政3年(1820) - 明治17年(1884)。信州高遠の儒者元恒の子。昌平黌に学んだ後帰郷して藩黌「進徳館」を設立、多くの人材を生み出した。

中村敬字。天保3年(1832) - 明治24年(1891)。江戸麻布生まれ。儒者となる一方ひそかに蘭学を学び、ロンドン留学を経て私塾「同人社」を建て洋学を教授、のち女子教育、障害者教育などの先駆者としても尽力しました。

### 江戸儒学と近代日本

江戸時代の漢学は朱子学、陽明学、古義学を問わず本質的に思弁的であり、いわゆる「理気心性の学」といわれたものです。きわめて理詰めであり、事象の概念化が行われています。それゆえ幕末明治になり洋学の受容という事態においても、もともと「理詰めの判断」に長じていた漢学者にとって、洋学も決して異質な学問ではありませんでした。漢籍の読書過程で、すでに洋学理解に必要な用語概念を備えており、彼らの頭の中には出来上がった学問と方法と思考力がありました。その学問的水準は西欧に比べても決して低いものではありません。幕末期にも幾多の人材を輩出し、「昌平黌」や「藩校」の選り抜きの秀才たちは、漢学の教養を基に新時代のリーダーとして、華々しく活躍したのです。

【記録】文・写真：広報部会・稲垣武志

## ボストン美術館所蔵 肉筆浮世絵展 「江戸の誘惑」



特別展「ボストン美術館所蔵 肉筆浮世絵展～江戸の誘惑～」が10月21日から12月10日まで開催されましたが、友の会の会員を対象とした特別観覧会が10月26日に催されました。

特別観覧会はまず1階の映像ホールで、江戸東京博物館学芸員の我妻直美さんによる見どころ解説があり、その

後に企画展示室での見学会が行われました。当日は友の会会員と同伴者を含めて参加者は約220名という大盛況の特別観覧会となり、映像ホールの通路まで埋まってしまう状況となりました。我妻さんはパワーポイントを使って展示されている浮世絵の一部を写真で紹介し、その見どころを丁寧に解説。参加者は展示室での見学にたいへん参考になる話を聞くことができました。

この特別展で展示された約80点の浮世絵については、特別展に合わせて発行された図録に写真と詳しい解説が掲載されていますが、その解説を参考に特別展の概要を紹介したいと思います。

ボストン美術館は約55,000点の浮世絵版画と約700点の肉筆浮世絵を所蔵しており、質量ともに世界最大級といわれています。それだけでも驚きのコレクションですが、さらに平成8年から9年にかけて行われた肉筆浮世絵の全面調査で葛飾北斎、喜多川歌麿、菱川師宣などの大作、名品が確認されました。その調査の成果は平成12年に三巻の図録として刊行されて

いるものの、特別展で公開された肉筆画約80点のほとんどがボストン美術館でも公開されたことがないので、たいへん貴重な展覧会でした。もちろん肉筆ですから、版画とちがって各作品はその作品1点のみということで、それだけにこの機会にぜひ見ておきたいという方が多かったですと思われる。それが特別観覧会参加者の盛況ぶりにも表われたということができるといえるでしょう。

見どころ解説を聞いた後、展覧会場に入ってまず目に入ってきたのが葛飾北斎の大幀絵「朱鍾道図幀」。会場では菱川師宣の「芝居町・遊里図屏風」、鈴木春信の「隅田河畔春遊図」、宮川長春の「吉原風俗図屏風」などなど、肉筆浮世絵のすばらしさを堪能することができた特別観覧会でした。

【取材】文・写真：広報部会・大石憲一



## 江戸博クリップ

### 学芸員の日常

わたくし、江戸博に勤めて今年で12年目になります。江戸博には、いろいろな専門の学芸員がいます（ちなみに、わたしは近代の建築が専門です）。

近世史・近代史（ひとくくりにしてもありますが本当はもっとこまかく分かります）・美術史・民俗学など、とても学際的です。

日常的な会話をしている「〇〇時代はこうだったんだよ」といった、豆知識を耳にする機会も多く、江戸博学芸員によるトリビア披露大会を開催したら盛り上がるのではないかと思います。

ふつうの方は、現代を通して、江戸時代を見るのだと思いますが、学芸員の中には、江戸時代というフィルターを通して、現代を見ている人もいます。「江戸時代はこれがふつうだったのに、おかしいなあ」という発言が出たりするわけです。

また、言葉遣いもふつうに話しているつもりのようにも、古文書に出てくる言い回しが混じること多数…。わたしには理解できないこともあり、意味を尋ねると「国史大辞典をひきなさい」と怒られてしまいます。

流行のテレビ番組を見ている人もあまりいないので、旬のお笑い芸人は誰

学芸員 早川典子

か?といった話題は、職場ではできません。大河ドラマや、時代劇、歴史が題材の映画などには興味があるらしく、そういう話だったら通じます。

学芸員のあるべき姿というのは、時代の変化とともに変わっていくのだろうと思いますが、歴史について何でも知っている検索エンジンのような人材は、博物館には欠かせません。歴史を心から愛してやまない、江戸博の学芸員たち、わたしはこころから尊敬しています。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

# 徳川氏発祥の地世良田東照宮とその周辺史跡村栗方

バスでめぐる～生品神社・東毛歴史公園・満徳寺・茂林寺～

江戸博をバス2台でスタート。一路、群馬県太田市の徳川氏発祥の地へと、東北自動車道を快適に走り、館林ICから一般道へ、関東平野の開けたのどかな景色を見ながら総勢78名を乗せてバスは走ります。車中で岩松友の会会長から当日訪れる史跡について懇切丁寧な説明を受け、事前に知識を得た上で最初に訪れたのは、新田荘「生品神社」でした。天喜年間(1053～57)には八幡太郎義家(源義家・新田義貞の先祖)が奥州征伐のときに戦勝祈願をしたと伝えられています。また、元弘3年(1333)、『太平記』によれば、ここ生品神社において、新田義貞は一族わずかに150余騎を率いて鎌倉幕府打倒の旗揚げをしました。友の会会員で地元在住の新井榮一さんの説明を聞きながら静寂のなか参詣、当時の面影をしのびました。

次に東毛歴史公園内の麦とろ料理「葵」での昼食をはきんで、「東毛歴史資料館」を訪れ、穴原副館長の説明を受けました。当資料館には新田氏・徳川氏にゆかりの深い長楽寺や世良田東照宮に伝えられる文化財の数々をはじめ、東毛地域の貴重な文化財が保存・展示されています。岩松会長の遠いご先祖、新田岩松氏の“猫の絵”はとてもユーモアがあり心を和ませてくれました。

続いて訪れた「長楽寺」(国指定史跡・新田荘遺跡)は、東国の禅文化発祥の寺で、承久3年(1221)徳川氏始祖の義季が開基となり、臨済宗の開祖栄西の高弟である栄朝を開山として創建されました。徳川家康が関東に入ると、徳川氏祖先の寺として長楽寺を重視し、幕府に信任の厚い天海大僧正を住職に任じて天台宗に改宗、その復興

にあたらせて、末寺700余カ所を擁する大寺院となったといひます。八幡太郎義家に連なる義季が、尾島(太田市尾島町)の徳川の地を領して徳川義季と名乗り、その義季の後裔が松平郷(愛知県豊田市松平町)に移って、松平太郎左衛門信重の入り婿になり、以後代々松平家を相続し、それから7代を経て、永禄9年(1566)家康の代になって、松平姓から徳川姓に復姓し、世良田徳川の地は徳川氏発祥の地として將軍家の厚い庇護を受けたそうです。以上地元ボランティアガイドの正田安司・高倉二男さんに詳しい説明を受け、ご案内をいただきました。



▲世良田東照宮で神職の説明を聞く

そしていよいよ世良田東照宮です。由来書によると、寛永2年(1625)、三代將軍徳川家光は、世良田が徳川氏の先祖の地ということから、日光東照宮古宮(元和年間造営の奥宮)をここに移築し、家康公をお祭りしたそうです。重要文化財である拝殿や本殿をはじめ宝物などを神職の熱のこもった説明を受けながら拝観しました。

次に縁切寺「満徳寺」を訪れました。縁切寺としては鎌倉の東慶寺が有名ですが、この満徳寺も近年有名になってきたようです。満徳寺は時宗、鎌倉の東慶寺は臨済宗の寺です。家康の孫娘千姫にかかわる由来によると、千姫は大阪城落城の後、この寺に入って(身代わりが入ったという説もある)離婚



▲縁切寺満徳寺遺跡

し、再婚したとのこと。こうして家康から縁切寺の制度維持の特別許可を与えられたことから、開山以来の縁切寺法が再確認されたと伝えられています。文化6年(1809)正月には、隣家からの出火によって本堂をはじめ境内残らず焼壊しています。満徳寺は徳川幕府が倒れると、その庇護を失い、明治5年(1872)廃寺になりました。縁切寺満徳寺資料館は平成4年の開館、館内にて高木館長からユーモアあふれる説明をいただきました。尼寺の門前で、女を追ってきた男にまさに捕まる寸前、焦った女はとっさに草履を門内に投げ入れる絵が展示されています。寺は幕府の寺社奉行の管轄下にあり、妻が一定期間こもれば強制的に夫から離縁状を取り付けられたそうです。草履が寺内にあれば女は“セーフ”。寺役人に一喝されれば、男は引き上げざるをえないのです。かつての伽藍のうち、本堂と玄関、門扉も、同年、復元されたそうです。

最後に分福茶釜で有名な「茂林寺」に寄りましたが、予定時間を超過していたため、茂林寺は参詣のみとしました。そして全員無事18時30分頃、江戸博に帰着、解散しました。普段電車ではなかなか行けない所が見学でき、とても楽しく充実した一日でした。

【報告】 文：会員・内田勝元、  
写真：広報部会・松原良

## えど友 サークルだまり

会員の自主的サークル・「えど友サークル」の最近の活動状況をご紹介します。

### ◎活動概況

◆江戸・東京を巡る会：11月23日(木・祝)六阿弥陀仏4番札所与楽寺を中心に田端界限を巡った・参加者11名。

◆落語・講談を楽しむ会：10月28日(土)1年間の活動を総括、今後の運営方針を話し合い決定した。参加者8名。11月14日(火)柳橋・蔵前界限の落語・講談ゆかりの地を散策・参加者8名。

◆藩史研究会：10月26日(木)上野高崎藩史研究発表・参加者13名。11月28日(火)川越、大多喜、高崎藩史研究発表を受け3藩主の墓域(平林寺)参拝・参加者18名。

◆古文書で『八丈実記』を読む会：10月12日(木)、10月27日(金)、11月9日(木)、11月24日(金)開催。参加者は各11名、9名、9名、7名。

### ◎スポット紹介 江戸・東京を巡る会

この会の前身は小笠原淑夫さんが主宰していた「江戸三十六見附を巡る会」です。2005年10月16日に同会が通算7回実施して目標達成後、引き続き同じメンバーで「江戸・東京を巡る会」がスタートすることになりました。世話人は磯邊晃さんです。磯邊さんから会の現況や方針をうかがいました。

当面は良い季節に2カ月に一度の計画で「江戸六阿弥陀仏」と「五色不動」巡りをしているとのこと。こ

の11スポットを一度にいくつもまわるのではなく、毎回そのうち一つを訪ね、あわせてその周辺の史蹟・名勝、神社・仏閣などを巡ります。ウォーキングが目的ではないので、全行程は90分そこそこ。「ゆっくり歩いてゆっくり学ぶ」のだそうです。

ちなみに本年11月23日の行事は田端周辺で、与楽寺(六阿弥陀仏・4番札所)、東覚寺、八幡神社、大久寺、大龍寺(正岡子規墓)、田端文士村記念館等を回りました(写真はそのひとコマ)。

現在会員は22名、うち女性は3名です。もっと女性が参加すると良いですね。磯邊さんは毎回コースを一人で下見してチェックし、用紙2枚の資料を作製して参加者に配布しています。もう一人ぐらい世話人を引き受けてくれる人がいないかなあという磯邊さんの気持ちは良くわかります。

この会は非常に自由でオープンな会と見受けました。会員(といっても常連の参加者)の他に、臨時的参加もOK。行程の途中から参加したり、途中で脱落?するのもOK。そのかわりすべては自己責任で、特に保険をかけるようなこともしない、ということです。そして全行程の終わりには打ち上げの「一杯」。参加は自由、何を呑むかも自由です。見たこと、学んだことその他大いに語り合い、友情を深めることが大切、と磯邊さんは語っていました。

【取材】文：広報部会・佐藤幸彦、写真：同・松原良



### ◆役員会

10月12日(木)18時開催。懸案事項の「会員適正規模」については、その検討が友の会の性格に照らし相応しくないため、予測される会員規模での問題点の検討にとどめ、役員会での検討を取りやめた。「会員証」の在庫が僅少となったため、発注することとしたが、今後は総務部会で在庫管理を励行することとした。出席10名。

11月9日(木)18時開催。懸案事項のその後の進捗状況が報告されたが、いずれも大きな進展はなく、年を越す情勢となった。出席8名。

### ◆事業部会

10月5日(木)18時から開催。最近実施した各種の催事の参加者状

## 会議・会合日誌

2006/10～2006/11

況等について各担当者から報告が行われた。10月以降の各催事の計画の補足と担当者を決定した。出席者12名。

11月2日(木)18時から開催。来年度のセミナー開催の曜日については、江戸博側から若干の要望が出されているので、調整する必要があることを確認した。また、来年度の古文書講座については、「募集要項」を3月発行の『えど友』誌上に掲載することとした。出席10名。

### ◆広報部会

10月20日(金)14時開催。「わたしのお宝」の募集定義についてま

とめたが、実際の募集は諸般の事情から見合わせることにした。「江戸博界限」の後続企画案について検討した。出席10名。

11月17日(水)14時開催。新企画の初回タタキ台について意見交換を行った。『えど友』35号の執筆担当などの大枠を決定した。出席9名。

### ◆総務部会

10月25日(水)13時開催。『えど友』No.34ほかの発送業務を行うとともに、友の会の主要書類の在庫管理等について検討した。出席者10名。

11月29日(水)13時開催。1月の特別観覧会の案内チラシほかの発送に引続き、主要印刷物の在庫調査を行うとともに、当面の行事について意見交換を行った。出席者9名。

## セイラムを訪ねて

森坂尚子

昨年1月、雪の一日でしたが、期待して小林惇一氏の講演「モース・コレクション」(「友の会セミナー“シーボルトとモースの日本コレクション・その2”」)を聞かせて頂きました。セイラムは、ぜひ一度訪ねたいと願っていたところです。6月機会を得て実現しました。

昔、大阪の古書店で買い求めた「モースの見た日本(小学館刊)」、それ以後はさながらおぼさんの昔話を聞くように、ページを繰っては江戸から明治へ移り変わる、いやほとんど江戸と変わらぬ、庶民の生活を楽しんだものです。1900年生まれ100歳で没した叔母が、記憶力抜群の人だったので、そこへこの本を持ち込み、色々とコメントをもらいました。

また関西では2回モース・コレクションを見ました(私は生まれも育ちも大阪で、かつ最近まで関西人)。一度は大阪万博公園の民俗博物館の「海を渡った明治の民具〜モース・コレクション展」で、他の一度は大阪高島屋の「幕末・明治 KANBAN 展」で、セイラム・ピーボディ博物館モース・コレクションから130点余の看板が来ました。ずいぶん前のことなので、細かいことは忘れてしまいましたが、日本の博物館では見ることができない品物で、泥のついた下駄まで集めていたのかと、感じ入ったことでした。

モースよりずっと以前に、フランス革命の影響でオランダの船は航海できず、アメリカ・セイラムの船長たちがオランダ東インド会社と契約し、中立国備船として鎖国日本の長崎に来ていますが、風待ち3カ月の間にオーダー



◀ニューポート町にあったペリーの銅像  
▼そばの石灯ろうには文恭院殿などの文字が読み取れる

して、持ち帰ったぜいたくな品々の写真を、セミナーで見せていただき、ますます興味が膨らんできたところ、その機会をも得たというわけです。保存の良い漆、寄木細工、螺鈿らでんの家具、調度品などを目にすることができました。ただ残念だったのはセイラム・エセックス博物館は



りっぱながら、肝心のモース・コレクション展示が多くなかったことです。博物館のモース展示室の一隅に、大田区と姉妹都市であり、市民、企業が寄せた寄付を示すプレートがありました。

写真はまったく予期していなかったペリーとの出会いです。ボストン・セイラムへの道筋、ニューヨークから海沿いに3時間ほど北上すると、小さなロードアイランド州があり、大富豪の別荘地として有名なニューポートという町の公園に、おなじみペリーの銅像が立っておりました。出身地だとのことですが、そのそばに見たような石灯ろうが立っているではありませんか。ドライバーの話ですと、幕府から土産にもらったものだ、とのことでしたが、どうも見覚えある姿かた

ちに、近寄ってよく見たらやはり東叡山とあり、寛永寺に多分立っていたものでしょう。文恭院殿とか天保12年(1841)とか、下野国大田原城主とかの字が読み取れます。大田原とは何処でしょうか。

帰国後調べてみましたら、栃木県那須の近く1万4千石の城主が、十一代將軍家齊が寛永寺に葬られたとき、寄進したものと思われます。立てられて10年ではるばる海を渡り、將軍ならぬペリーのそばに立っていることを、大田原のみなさんはご存知でしょうか。ペリーへの贈り物のほとんどは、ワシントン・スミソニアン博物館にあるということです。ペリー銅像の下部には下田での日米和親条約の様子が表されていました。いうまでもなく感無量でした。人との出会いだけでなく、灯ろうとも出会うものですね。



## 私のお宝(古文書) 「薩摩藩大砲購入依頼状」

橋浦 稔

都内旧家で家宝として保存していたものを昭和28年(1953)に私が購入し、現在も私が所有している古文書があります。

その古文書は「薩摩藩の大砲購入依頼状」で、薩摩藩がオランダ人を通じてフランスから大砲を購入することを依頼したものです。

昭和49年(1974)、この古文書は日本歴史学会編集の『日本歴史』第309号(2月号)の巻頭に掲載されました。解説を書いてくださったのは、私の大学院での指導教授である児玉幸多先生(元学習院大学長、江戸東京博物館初代館長)です。

この文書は、大正10年(1921)に



薩摩藩の  
大砲購入依頼状



▲「私のお宝」の古文書

皇太子が欧州巡遊をされたときに、オランダの侍従武官海軍中將ボードウィン氏から、侍従武官竹下勇(のち海軍大将)氏に贈られたもので、私のお宝となっています。

### ◆◆◆原稿を募集します◆◆◆

会員の投稿欄「えど友プラザ」への原稿を募集しています。戦前戦後の思い出、名所めぐりの感想、趣味や所属サークルのできごと、あるいは東京や江戸に関することなどを1000字程度にまとめて事務局宛お送りください。採用分については記念品を差し上げます。なお、原稿はお返ししません。



▲薩摩藩が購入を依頼したシャスポー銃

●シャスポー銃 幕府がナポレオン三世から贈られ、幕府も大砲輸入した銃で  
(口径11mm、全長130cm) 精製の夏型式の新式銃

## ◆◆ご意見・ご要望にお答えします◆◆

問 古文書講座は入門・初級では物足りないので、中級レベルで解説だけでなくその歴史的意味の解説を十分加えて教えていただきたい。

答 ごもつともなご意見です。古文書講座についてはこうしたご意見をはじめ、参加のみなさんのアンケート結果などを踏まえて、講師の先生とも話し合いを行いました。それをもとに来年度の計画を検討しましたが、詳細については次号でご案内する予定です。

問 見学会は第2土曜日が多いようです。できればその傾向を固定しないで、第1土曜日、第3土曜日にするとか開催日の検討をお願いします。

答 今年の見学会の実施日は第2土曜日が3回、第4土曜日、第5土曜日、第4日曜日が各1回となっております。確かに第2土曜日が多かったのですが、見学会実施日は友の会セミナー、古文書講座、えどはくカルチャーなどの日程との調整の上決定しており、見学会を意図的に第2土曜日に設定しているわけではありません。この点をご理解いただきたいと思います。しかしながら、会員のみな

さんに平等に参加の機会をつくることも必要と考えますので、今後はアンケートなどみなさんのご意見を参考に実施日を考慮したいと思っています。

問 特別観覧会は平日でいつもあきらめていましたが、今回(10月26日)平日5時半からでぎりぎり間に合いました。今後も開館時間の延長(金曜日)をご検討ください。

答 観覧会などの開催日時・場所は江戸博を含む特別展の主催者間で事前調整の上決定される仕組みになっております。したがって、今後とも今回のような方式をお約束することは困難です。なお、お寄せいただいたご意見は江戸博にもお伝えしました。

問 友の会会報の江戸博界隈の食事処の紹介、とても重宝しています。江戸博に行く時には、できるだけそこに行くようにしています。今後も続けて下さい。

答 お役に立てて大変嬉しく思います。今後ですが、「江戸博界隈」のシリーズは第12回で終了し、今号から新シリーズ「江戸博から大川を渡って…」が始まります。このシリーズでも形は変わりますが、食事処の紹介を行いますので、引き続きご愛読願います。

【柳橋・浅草橋界限】



神田川と屋形船

ご好評をいただいたシリーズ「江戸博境界」は、今月号より少し足を伸ばして大川を渡った江戸通り沿いを歩いてみることにしました。第1回目は両国橋を渡って台東区柳橋、浅草橋方面へ。

欄干にかんざしが飾られた柳橋

総武線の鉄橋を右に見ながら両国橋を渡りきったすぐの信号を右に、狭い一方通行の道に入るとすぐに神田川にかかる柳橋に出ます。その橋のたもとに柳橋のいわれを記した碑があります。ただ橋を渡る手前は中央区、渡ると台東区になり、両区の教育委員会がそれぞれに案内板を設置していますが、ここでは台東区側の説明の一部を紹介します。「柳橋は神田川が隅田川にそそぐところに架設されたので、はじめは『川口出口の橋』と呼ばれた。近くに幕府の矢の倉があったのにちなみ、矢の倉橋、矢之城橋と呼んだともいう。柳橋は享保(1716～35)ころからの呼称らしい」。しかしなぜ柳橋と呼ばれるようになったかは明確ではなく①柳原堤の末にあるから、②矢之城を柳の字に書きかえた、③橋畔の柳にちなむ、の3説があり、台東区教育委員会では③の説を採っています。橋が最



亀清楼(左)と柳橋

初に架けられたのは元禄11年(1698)で、鉄橋になったのは明治28年(1895)、現在の柳橋は関東大震災で橋が落ち昭和4年(1929)に架け替えられたものです。永代橋がモデルとも。平成3～4年にかけて修復され、緩やかなカーブを描く鉄橋は緑色に塗られ、欄干にはかんざしがたくさん飾られています。橋から神田川を見るとたくさん屋形船が両岸に並び、船宿は昔ながらに繁盛しているようです。屋形船、柳橋そしてかんざしとなると割烹、料亭、船宿が多数あった花街としての柳橋の華やいだ風景がほうふつとしてきます。「春の夜や女見返る柳橋」「贅沢な人の涼みや柳橋」。こんな句を残したのは正岡子規。今も有名な割烹「亀清楼」の玄関前にこの句を紹介し



黒板塀の残る伝丸

た説明板が建っています。この街を多くの文人、墨客が訪れたといいますが、この柳橋に住んでいた文人に島崎藤村がいます。明治39(1906)年から大正2年(1912)までの7年間、浅草新片町1番地に住んでいたとのことですが、現在の柳橋界隈を歩いてもここに住んでいたという記念碑などは残念ながら見当たりません。藤村は新片町に住んでいる間に「春」、「新片町より」、「芽生」、「千曲川のスケッチ」、「後の新片町より」などを著したとのことで、書物やネットで関係資料はいろいろと見ることができますが、住居跡を示したものはなかなかないようです。ただ、台東区発行の「重ね地図で江戸を訪ねる」の地図には「住居跡付近」と心もとない紹介が載っています。

割烹でランチ、食事どころも多彩

さて、この地もビル街になり昔のお



浅草見附跡の碑

もかげは少なくなりましたが、柳橋の一角に黒板塀の割烹「伝丸」があります。亀清楼ではお昼のメニュー(1700円～)もありちょっとぜいたくな気分を味わえますが、伝丸でも1000円ほどでお昼にてんぷら定食などを食べることができます。食事の後に甘いものをとすぐ目の前の篠塚神社前にある「にんきや」で白玉あんみつなどを楽しむ人も。この界隈はビル街になりましたが食事をするところはいろいろあるようです。平日のお昼はサラリーマンで満員になるお店もあるようです。ついでながらお土産にという方にお勧めは神田川沿いの「梅花亭」、三色梅最中など和菓子で人気のお店です。亀清楼前の柳橋畔の小松屋の佃煮を買求める人も多いようです。柳橋1丁目は狭い地域ですが、歩いてみればそれなりに奥深い所といえるでしょう。

この町の表通りは江戸通り。通りを挟んで反対側の町名は浅草橋1丁目。神田川に架かる橋が浅草橋。江戸三十六門の一つで下町唯一の見附である浅草見附があった所で浅草御門とも呼ばれていたようです。見附の碑や説明板が浅草橋の台東区側に建てられています。江戸通りは浅草観音への参道であり日光街道への道です。現在は交通量の多い江戸通りですが、通りに面した両側に節句品の老舗問屋である吉徳、久月などJR浅草橋駅周辺には多くの問屋が軒を連ね、新年を迎えると親王飾りから段飾りまで3月節句の商戦が一段と賑やかになります。問屋街ですが一般のお客もたくさん訪れます。江戸の名残と近代流通業の町柳橋、浅草橋をぜひ歩いてみてください。

【取材】 文・写真:広報部会・大石憲一  
イラスト:同・松原良

# 催事案内

## 友の会セミナー

### 第50回「女髪結の暮らしと働き」 — 19世紀江戸・東京の社会と女性 — 講師 横山百合子さん

◆ 19世紀の江戸・東京には、数千人にのぼる女髪結がいたといわれます。女性の髪を美しく結い上げる女髪結の暮らしや働きは、どのようなものだったのでしょうか。また、それは、明治維新をへてどう変化したのでしょうか。男性の髪結の場合と比較しながら女髪結の姿をさぐり、19世紀の都市社会の一端に触れることができるようお話しさせていただきます。

○講師略歴：よこやま・ゆりこ

立教大学兼任講師(非常勤)。東京大学学術研究支援員。日本近世史、明治維新史を専攻。特に、江戸・東京をフィールドとし、幕末維新期の都市社会の変容に関心をもつ。著書『明治維新と近世身分制の解体』(山川出版社、2005年)、歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座』7巻『近世身分制の解体と明治維新』(東京大学出版会、2005年)。

- ・開催日：1月27日(土) 14:00～15:30
- ・申込締切：1月16日(火)必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階会議室
- ・定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- ・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)  
【企画担当責任者】山口千恵子(事業部会)

### 第52回「青山・善光寺と江戸城大奥」 — 長野・善光寺の史料を中心に — 講師 菅野俊輔さん

◆ 青山の善光寺は、信州(長野)善光寺の「宿寺」として、江戸に幕府を開いた徳川家康の庇護を受けて慶長6年(1605)谷中に建立され、宝永2年(1705)現在地に移ってきました。長野・善光寺の住職としては浄土宗系の「大本願上人」と天台宗系の「大勧進上人」のふたりがいて、大本願上人は尼僧で、江戸・青山の宿寺の住職を兼帯していました。大名か公家の子が上人位につくという高い格式を与えられていたこともあり、「御礼年」の登城など、江戸城＝徳川将軍家に対するごあいさつは「大奥」が外交の窓口でした。善光寺「住職」と江戸城大奥との知られざる外交の一端を長野・善光寺の史料を中心に紹介させていただきます。

### 第51回「藤沢周平の江戸」 — 「しぐれ」作品の魅力 — 講師 井上 謙さん

◆ 近ごろ、周平作品のテレビ化、映画化が目立ち、雑誌特集をはじめ、週刊『藤沢周平の世界』が出るほどの人気です。その多くは現代小説ではなく、時代小説あるいは歴史小説ですが、その魅力はいったいどこにあるのでしょうか。また、作品の背景として「川」「水」「しぐれ」が頻出します。作者の意図をはじめ、江戸で暮らす市井人にとってそれはどんな意味があるのでしょうか。そして周平が「時代物で今の人情を書くのにはあの時代(江戸)がいちばんいい」と語るのにはなぜでしょうか。そんなことを課題に「しぐれ」作品を通して周平文学の特色や魅力を探っていただきます。

○講師略歴：いのうえ・けん

昭和3年(1928)東京都出身。日本大学文理学部卒業。日本大学・近畿大学教授を退職後、現在NHK文化センター(青山・横浜教室)講師。専門は日本近代文学。著書『横光利一—評伝と研究』(おうふう)他多数。

- ・開催日：2月24日(土) 14:00～15:30
- ・申込締切：2月13日(火)必着
- ・会場：江戸東京博物館・1階会議室
- ・定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
- ・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)  
【企画担当責任者】山口千恵子(事業部会)

## 「イラスト」「さし絵」を募集します

『えど友』をより親しみやすくするために、会員のみなさんから「イラスト」や「さし絵」を募集しています。題材は自由です。ぜひあなたの作品を事務局宛にお送りください。採用分については記念品を差し上げます。なお、原稿はお返しいたしません。

## 見学会

- 1月2日(火)から3月4日(日)まで開催される特別展「江戸城」を受けて、「江戸城周辺探訪(1)」を3月下旬に計画中です。シリーズとして数回行う見学会の第1回ですが、詳細は次号でご案内いたします。

## 古文書講座

### 第3期を1月から開講(すべて申込の受付は終了)

#### ◆入門編

- ・開催日：1月10日(水)、2月7日(水)、3月7日(水)
- ・開催時間：14:00～16:00
- ・会場：江戸博1階会議室
- ・講師：小松賢司さん(学習院大学大学院史学専攻)
- ・参加費：1500円(初回当日払い)

#### ◆初級編(1)

- ・開催日：1月17日(水)、2月21日(水)、3月14日(水)
- ・開催時間：14:00～16:00
- ・会場：江戸博1階会議室
- ・講師：長坂良宏さん(学習院大学大学院史学専攻)
- ・参加費：1500円(初回当日払い)

#### ◆初級編(2)

- ・開催日：1月20日(土)、2月17日(土)、3月17日(土)
- ・開催時間：14:00～16:00
- ・会場：江戸博1階会議室
- ・講師：小宮山敏和さん(徳川林政史研究所)
- ・参加費：1500円(初回当日払い)

【企画担当責任者】 上田太一(事業部会)

## お申込方法

- ◆普通はがきに、①催事名・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。

「往復はがき」の必要はありません。

なお、見学会に限り傷害保険の関係で同伴者の氏名、住所、電話番号も書いてください。

- ◆締切：各催事の案内をご覧ください。
- ◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
- ◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
- ◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 江戸東京博物館友の会事務局

- \*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。  
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
- \*「受講票」未着のお問合せや参加予定変更のご連絡などはなるべく水曜日から金曜日にお問い合わせいたします。
- \*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。



## 会報<えど友>第35号

平成19年1月1日発行(隔月奇数月1日発行)  
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会

編集長兼発行人：松原良(副会長) 副編集長：菅沼和男  
編集人：岡橋園子、佐藤幸彦、大野晴美、稲垣武志、岡田守弘、  
岡本静雄、林榮治、大石憲一  
発行：江戸東京博物館友の会  
〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1 電話 03-3626-9910

## 会員優待のお知らせ

### ●特別展「江戸城」

会期 2007年1月2日(火)～3月4日(日)

休館日：毎週月曜日(ただし、1月8日、15日、2月12日は開館)と2月13日(火)

\*年始は2日から開館しますが、1月2日(火)・3日(水)は午前11時からの開館です。1月4日(木)から通常どおり午前9時30分開館となります。

図録 定価、割引とも未定

会員：一般600円、65歳以上300円、大・専門生480円

同伴者：一般960円、65歳以上480円、大・専門生760円

### 次回予告

### ●特別展 ロシア皇帝の至宝 ～世界遺産クレムリンの奇跡～

会期 2007年3月20日(火)～6月17日(日)

休館日：毎週月曜日(ただし、4月30日、5月14日、5月21日は開館)

## 企画展と特集展のご案内

### ●企画展 北斎展—風景画の世界

開催期間 2007年1月2日(火)～2月12日(月・祝)

会場 5階常設展示室内 第2企画展示室

### ●特集展 <sup>いえもち</sup>徳川家茂とその時代

開催期間 2007年1月2日(火)～3月4日(日)

会場 6階常設展示室内 特集展示コーナー

### ●次回企画展 江戸博の雛祭り

開催期間 2007年2月20日(火)～4月1日(日)

会場 5階常設展示室内 第2企画展示室

### 「友の会事務局」の執務日時のお知らせ

友の会の事務局には、専属職員が常駐しているわけではありません。友の会へのお問い合わせ等のお電話は次の日時にお願いします。原則・毎週水曜日と金曜日の10時～12時、13時～17時です。